



24年度決算を承認

評議員会 理事2氏が交代

毎日新聞西部社会事業団は5月27日、北九州市小倉北区の毎日西部会館会議室で2025年度の定時評議員会を開き、24年度の事業報告案や決算案を承認、辞任に伴う理事を選任した。

定時評議員会では、24年度の各種募金の状況や実施や助成事業などを盛り込んだ事業報告案や決算案を審議、原案通り可決した。また、辞任に伴う理事2名には、新たに西鉄バス北九州㈱代表取締役社長の吉田透氏、西部ガス㈱常務執行役員北九州代表の内藤篤氏が選任された。

これに先立ち、3月14日の24年度第2回通常理事会（写真）では、25年度の予算案や事業計画を審議した。事業予算は、チャリティー福岡展の休止など事業見直しを図り、24年度を約7百万円下回る5850万円規模とした。その他、各種事業については例年並みの内容で行うことを決めた。



24年度の各事業活動の内容は次の通り。

海外難民救援事業

毎日新聞社と東京、大阪、西部の3事業団が1979年（昭和54年）から取り組み、毎日新聞紙面と連動した「海外飢餓・難民救援キャンペーン」募金。24年度は、世界でも有数の

難民受け入れ国であるアフリカ東部のウガンダを取材し、毎日新聞紙上で展開。読者の反響は大きく、多くの浄財が寄せられた。当社会事業団は、国連世界食糧計画WFP協会、ペシャワール会やロシナテスをはじめとするNGOに合計110万円を届けた。

東京・大阪両事業団とともに、全体では18団体に1210万円を贈呈し、キャンペーン当初からの総額は17億3千万余りとなった。

小児がん征圧募金

1996年（平成8年）から展開している毎日新聞と毎日新聞社会事業団のキャンペーン「生きる——小児がんの子どもたちとともに」と連動した募金で、小児がんの子どもを守る会や保護者グループなど、病と闘う子どもたちを支援する組織の活動援助金に充てた。

当社会事業団は、3月18日に小児がん征圧募金の贈呈式（写真）を執り行い、にこスマ九州、九州がんセンター小児科親の会・大きな木、久留米大病院小児科血液グループ親の会・木曜会、小児



第3・4次分として贈った。また、東日本大震災救援金は岩手・宮城・福島各県にそれぞれ15万円、毎日希望奨学金は事務を担当する大阪社会事業団へ500万円を送金した。当社会事業団の災害被災者救援事業への総額は1045万円となった。

児童福祉事業

がん家族会・ひまわりキッズ、長崎ペンギンの会、宮崎ひまわりキャンプ、レモネードスタンドinふくおか実行委員会、レモネードスタンドin SGA 実行委員会の8団体に合計100万円を配分した。

東京・大阪両事業団とともに、全体では31団体に1540万円を配分し、これまでの贈呈総額は4億4千万余りとなった。

災害被災者救援事業

災害により大きな被害が想定される場合、緊急に被災者救援金を呼び掛ける事業で、24年度も能登地震救援金を継続した。当社会事業団は、被害状況の見え始めた5月に石川県へ、8月に日本赤十字社へそれぞれ300万円、200万円を

児童虐待や養育放棄など、子どもたちを取り巻く環境は依然として厳しい。社会のあすを担う大事な子どもたちを守り、育むため、24年度は6事業に370万円余りを助成・援助した。筑豊京築地区の児童養護施設に在籍する中高生を対象に、職場体験や講演会などを通じて、社会人としての自覚を促す活動する「合同自立体験セミナー」。

田川児童相談所と筑豊京築地区児童福祉施設長会が合同で開催し、児童たちの体力向上及び、ほかの施設とも親睦を深めるために実施する「ボウリング大会」、「フレ愛レクレーション大会」。

経済的に困っている家庭の中学生を対象にした一円玉募金による「無料の食事

付学習塾事業。

児童養護施設を退所後も、なかなか自立できないでいる子どもたちを支えるために、青少年の自立を支える福岡の会が運営する「自立支援ホーム」。

また、当社会事業団では児童養護施設や母子施設の子どもたちの新入学・卒業祝いのプレゼント事業を行っている。24年度も福岡・山口両県の66施設を対象に調査用紙を配布、小学校に入学予定の子どもと中学・高校を卒業予定の生徒たちの人数や希望のプレゼントを調査した。その結果、対象者は61施設の428名であることが分かり、新入学児童にはランドセルやリュックサック、手提げ、雨具セット、図書カードのいずれか希望の品を、中学・高校を卒業予定の子どもたちには目覚まし時計か図書カードを贈った。

障害者福祉事業

事業件数としては最も多く、今期は15件で、うち4件が名義後援。合計で88万円余りを助成・援助した。障害のある人が、日々の生活の中で自分の思いを詩にしたものに、ボランティア

アがフォークソングのメロディを付けて歌う「わたぼうし音楽祭」。

人の話を一所懸命に聞く「傾聴」を学び、自分も他者も大切にすることを育み、ひいては若年層の自死防止につなげる「傾聴のココロ」工授業を届けるプロジェクト」。

ハンセン病で視覚も皮膚感覚も失った人たちに寄贈する事業の「声の点字毎日」。

幅広い世代の盲学校生らが、自らの経験や苦悩、そこで得た新たな気づきなどを伝える「全国盲学校弁論大会」。

北九州市内の10歳以上の身体障害児を対象に、日頃の練習の成果を競う場として開催する「北九州市障害者水泳大会」。

九州各県のろう学校の小・中・高校生が、文化活動やスポーツを通じて交流する「九州地区聾(ろう)学校体育・文化連盟大会」。

北九州市障害者スポーツ協会が、障害者のスポーツ振興を目的に開催する「北九州市障害者ボウリング大会」。

障害のある人となない人が一緒に楽しめる競技として

ふうせんを使ったバレーボールを競技としてルール化。「障害者の完全参加と平等」を掲げて活動する「日本ふうせんバレーボール協会」。

中間市の手をつなぐ育成会が、市内の知的障害児らの交流及びレクリエーション行事として実施する「年末餅つき大会」。

脳損傷への理解と支援の充実を図るため、高次脳機能障がいを考える会・虹が催す「高次脳機能障害啓発研修会」。

北九州市と北九州市手をつなぐ育成会が、知的障害児者の入学や卒業・成人・還暦など、人生の節目を迎えた人たちを励ます「門出を祝う会」。

名義後援事業は次の通り。

盲人文化の向上と福祉増進に先駆的業績をあげた個人・団体を表彰する「点字毎日文化賞」。

障害を持つ人たちがら絵画や書、デジタル写真などを募集し、入賞作品を県庁ロビーに展示する「肢体不自由児者の美術展」。

手足の不自由な子どもたちの福祉向上のために、長年活動する「福岡県肢体不自由児協会70周年記念の会」。

北九州市の障害者スポーツの祭典で、全国障害者スポーツ大会の選手選考も兼ねる「北九州市障害者スポーツ大会」

医療福祉事業

小児がんなどの難病治療を受ける子どもとその家族のために、滞在施設を提供している福岡ファミリィハウスへ30万円を助成。小児がんは治療期間が長期にわたるため、家族は病院周辺に宿泊しながら看病する必要があり、患者だけでなく、家族にとっても時間的、経済的な負担が少なくない。福岡ファミリィハウスは、福岡市内に2施設・5部屋を運営し、九大病院をはじめ、九州がんセンター、福岡市立こども病院などに入院、通院する患児や付き添う家族に、1部屋1家族1泊1000円という安価で提供し、支援している。

高齢者福祉事業

歌うことで高齢になっても活動的に生きる「80歳からの合唱団北九州」へ、当社会事業団の遺贈寄付から運営費として20万円を助成。活動費用は基本、団体の会費で賄っているが、地域イベントへの参加や、福祉施設・病院等への慰問(いもん)など、活動内容を充実させるために支援している。

福祉団体助成事業

24年度は、12団体へ合計145万円余りの助成金を贈った。

病気や災害などで親を亡くした子どもたちや、障害などで親が働けない家庭の子どもたちを、奨学金や教育支援、心のケアで支える「あしなが育英会」。

自殺予防のための電話相談「いのちの電話」。

福岡、北九州、佐賀、大分の4団体へ助成した。

視覚、聴覚とも不自由な人たちの福祉向上と社会参加促進のために活動する「福岡盲ろう者友の会」。

ホームレスの生活や住宅支援、各種保健プログラムなど、自立に向けた取り組みをしている「抱撲」。

肢体不自由児の研修費用を助成する「山口県共同募金会」。

交通事故遺族の実態調査や家族への見舞金など、交通遺児への各種支援事業をする「福岡県交通遺児を支える会」。

視覚障害者の自立支援のため、盲導犬を育成し、無償貸与している「九州盲導犬協会」。

障害者の自立支援のために、障害者本人や家族から各種相談を受け、生活環境に合わせた福祉サービスへの橋渡しをする「北九州あゆみの会」。

障害福祉が、施設中心から「地域福祉・在宅福祉」へと変化する中、地域の中で「障害のある人もない人も」とともに暮らせる社会づくりを目指そうと、ボランティア機能の拡大強化を図る「北九州市障害福祉ボランティア協会」。

「そよかせ」11月号・3月号もどうぞ参照ください